ライチョウの競合種となりうるヤマドリや、渡り途中のノゴマやコミミズク、ノビタキなどもリストアップされました。想像以上に、多様な生きものが高山帯を利用している様子がわかりました。当日は生きものの写真を写しながら、調査の苦労話や裏話なども交え、お話しさせていただきました。車座になっての議論では、センサーカメラ自体や設置方法のことから、撮影された生きものの生態など多義にわたり、みなさんと楽しくやりとりすることができました。（堀田昌伸）

第8回　信州の伝統行事と生物多様性　1月14日

“盆棚”を知っていますか？お盆にご先祖様をお迎えするため、机を出し、ござを敷き、盆花を飾り、胡瓜や茄子の牛馬や野菜などを供えたものです。昭和30年代の信州では地域毎に多様な盆棚が作られ、ほとんどの盆棚を山野で採取されたキキョウが彩っていました。こうした盆行事の変化に生物多様性の減少がどう関わっているかを明らかにするため、県下7地域で、昭和30年代以降の盆行事の変化とその要因についての聞取りと昭和30年代の盆棚の復元を行いました。今回はその調査結果の一部についてお話しました。

生物多様性が人の暮らしにもたらす恵みの一つである“文化多様性”は、各地の生態系を維持し、人の社会・精神生活を支える礎にもなっているといわれます。多様な自然環境を擁する長野県は伝統文化にも多様性がみられますが、近年生物多様性の減少が指摘され、文化多様性へも影響が懸念されます。そこで県内の市町村誌等から明治～昭和30年頃の野生生物を用いた伝統行事について調べました。50の年中行事と54の祭り・神事の記載があり、107種類の野生生物が用いられていました。伝統行事で野生生物利用の地域的多様性が最も高かったのは小正月の物作りとお盆の迎え盆でした。また“盆花迎え”は多くの地域で行われ、代表的盆花が県版レッドリストに掲載されているキキョウでした。そのため盆行事は、文化多様性と生物多様性の関連を把握する格好の事例になると考えました。

復元された昭和 30 年代の
安曇野市三郷の盆棚

信州の盆棚の多様性は減少し、盆花はすべて栽培・購入されたものに変化していました。その要因には、昭和40年以降の勤めを中心とする生活様式への変化、盆花やござの栽培・購入化、家の建て替え等の社会的要因の他、盆花やござ等に用いられた野生生物の減少といった自然的要因もあげられました。しかし、その自然的要因も、圃場整備、薪炭林の利用放棄や農地開発等の社会的要因によるものでした。つまり、盆棚の多様性の減少には生物多様性の減少も関連していましたが、それも社会の変化が引き起こしたものでした。

会場では“各家で盆棚を作るには限界がある”等の意見を頂きました。その通りだと思います。一方で地域の文化を継承しながら生物多様性を保全する取組みは、里山等二次的自然の保全に役立ち、多くの地域住民に参加してもらえる可能性がある点で重要です。盆行事を地域の資源として再生し、そのなかでキキョウなどの生き物も守っていけたらと考えています。（浦山佳恵）